

（今朝まで、二度とフェラチオなどしないと誓っていたのに、平気でこうちゃんのを舐めているなんて。ああ、わたしは軽佻浮薄な人間だったのね）

右側の充穂先生は長く差しだした舌を肉幹にからませて、ていねいに舐めこすっている。

（信じられない。姉さんや真衣といっしょに、こうしたオチン×ンをしゃぶり合うなんて。ああ、たまらない気分だ）

左側の真衣先生も舌をせわしなく動かして、付け根から睾丸までを往復している。

（よかった。沙織姉さんが素直になってくれて。ああ、おいしいです、こう君）

三人三様の舌使いでペニスを綺麗にされて、弘太郎はすぐにも射精しそうになる。

「ど、どうして、先生たちがそんなことを？」

三姉妹は絶え間なく舌と唇を働かせて、少年に無上の悦楽を贈りながら答えた。

「こうちゃん、わたしたちは牝犬なのよ」

「犬なら、大好きなこうしたのモノを舐めるのも当たり前だ」

「こう君を舐めるのは、とっても楽しいですもの」

しかし三人が相談する時間などなかったはずだ。姉妹ならではの以心伝心で欲望を共有して、抜群のチームワークで、弘太郎を追いつめていく。

童貞喪失から十日目にしての三姉妹同時セックスに同時フェラチオまでされては、



とても我慢など不可能だ。弘太郎は与えられる過激な快楽に身も心もまかせて、一気に射精へと没入した。

「あああ、最高です。また出ます！ 出しますよ!!」

腰が大きく跳ねあがった。反動で後頭部と背中を屋上に打ちつけたが、痛みなど感じるひまもない。精巢から尿道へ、二度目の精液が猛烈な勢いで突進する快感に、全身が満たされる。

「うああああ、気持ちいいっ!!」

再び大の字になった弘太郎の股間で、亀頭が左右に激しく首を振りたくり、鈴口から二発目の射精を勢いよく噴出する。

「きやあっ!」

「うひゃあ!」

「あああん!」

沙織先生、充穂先生、真衣先生の赤く染まった美貌に、粘つく精液が次々と浴びせられ、白く塗りつぶされていく。

三姉妹ともに自分の唇のまわりに舌を這わせて、生徒の絶頂の体液を舐め取った。犬というより猫が顔を洗うように片手で精液をぬぐい、それも口に運ぶ。口内にひろがる少年の味に反応して、ブルブルツと身体がわななき、重力に引かれて伸びた六つ

の豊乳が盛大に揺れた。

「ああ、また吞んじやったわ。こうちゃんの精液」

「こうしたの味、はああ、たまらない」

「あうんっ、とてもおいしいです」

いよいよ顔を上気させて、充穂先生は四つん這いの手足を動かして、大の字のまま弘太郎の胴体をまたいだ。

「次は、わたしがこうしたのオチンメンを楽しませてもらうよ」

「ええっ、またですか」

「姉さんが楽しんでいるのを見せつけられて、我慢していられるものか」

弘太郎の腰の上に、充穂先生が腰をおろした。絶頂の余熱でふっくらと盛りあがった恥丘の中心を勃起に押しつけ、前後にこすりたててくる。充穂先生の濡れた柔肉の谷間と弘太郎の硬い牡肉が摩擦し合い、ともに快楽を高めた。

「はああっ！ こうたの元気なオチンメンが、わたしにこすれるう。気持ちいい！」

「充穂先生がこすれて、うおっ、たまらないです！」

左右に振られる弘太郎の顔を、四つん這いの真衣先生の潤んだ瞳が覗きこんだ。身も心も犬になったように舌を伸ばして、弘太郎の喘ぐ口をペロペロと舐めまわしてくる。生徒の顔を唾液にまみれさせて、真衣先生は泣きそうな表情で懇願した。